

# 『白縫譚』の改版本

佐藤 至子

## 一 はじめに

合巻ごうかんは、十九世紀に江戸で出版された戯作小説の一ジャンルで、ほぼ全丁に挿絵があり、絵の余白に細字で文章が書き込まれるという特徴を持つ。

嘉永三年に初編が出版され、明治十八年の七十一編まで版本の所在が確認されている『白縫譚』しらぬひものかたりは、幕末期の合巻を代表する作品の一つである。<sup>①</sup>泉鏡花に影響を与えた作品として注目されつつも、『白縫譚』そのものが作品研究の対象となったのは比較的最近のことであり、書誌学的見地からの研究も、鈴木重三氏による『日本古典文学大辞典』<sup>②</sup>「白縫譚」の項における解説がある他には、東京大学所蔵本の書誌が『東京大学所蔵草双紙目録』<sup>③</sup>によって公にされているのみである。<sup>④</sup>

筆者は平成十五年度から『白縫譚』の諸本調査を開始し、現在も継続している。調査過程で、『白縫譚』には初版の初印本とその後印本がある他、編によっては改版本とその後印本が存在することを確認した。鈴木重三氏は前掲解説において、『白縫譚』の諸本について「初版本とそれによる後摺本のほかに、幕末に表紙以外を相当編改刻した後版

本、明治年間に表紙二、三種を改刻し、これのみを各冊に付した後版本などがある」と述べておられ、現在のところ、これが『白縫譚』の改版本について言及されたほとんど唯一のものである（『東京大学所蔵草双紙目録』は三編の改修について短く言及するのみ）。結論を先に言えば、鈴木氏が「幕末に表紙以外を相当編改刻した後版本」と述べておられるのは初編十八編の内の数編について存在する改版本のことであり、「明治年間に表紙二、三種を改刻し、これのみを各冊に付した後版本」と述べておられるのは、明治期に『白縫譚』を求版した丸屋鉄次郎によって出された、数種の表紙を編数字のみ修正して複数の編に使い回した後印本のことを指していると思われる。この丸屋鉄次郎版については改めて報告することとし、本稿では初編十八編の内に見られる改版本について、改版の時期と板元を明らかにするとともに改面の差異について述べ、鈴木氏が示唆された改版本の実態を紹介したいと思う。

## 二 覆刻版の出版時期と板元

『白縫譚』には藤岡屋慶次郎（以下「藤岡屋」、柳下亭、広岡屋幸助（以下「広岡屋」、丸屋鉄次郎（以下「丸鉄」）の四軒の板元が関わっている。どの板元から、何編の初版がいつ出版されたかをまとめると、次のようになる。なお改元月以前に出版されたものの刊年は、改元前の年号で表記した。

柳下亭は『白縫譚』の作者である柳下亭種員のことである。嘉永六年十二月に地本双紙問屋仲間に入し、ただちに『白縫譚』出版に参入したが、安政五年八月に病死した。版權を購入した広岡屋幸助（安政六年五月に地本双紙問屋仲間に加し）は、明治五年に創刊された「日々新聞」の経営に参画したことを契機に、丸鉄に版權を譲り渡した。さて、柳下亭は、単独版行となった安政三、四年に次のような広告を出している。

表1 板元の変遷

藤岡屋	初〜十四編	嘉永二〜六年
藤岡屋・柳下亭（相板）	十五〜二十一編	嘉永七〜安政二年
柳下亭	二十二〜二十六編	安政三〜五年
柳下亭・広岡屋（相板）	二十七編	安政六年
広岡屋	二十八〜六十一編	安政七〜明治四年
丸鉄	六十二〜七十一編	明治十一〜十八年

乍憚口上（略）此度摩滅の分初編よりことごとく再板致新板同様美麗に製本仕（略）

（二十一編・奥目錄、安政三年夏〈奥目錄年記「安政丙辰仲夏」〉）  
初編より十八編まで悉く再版出来いたし新板同然見事なる草紙に相なり候

（二十三編・二十丁裏、安政四年刊）

安政三、四年に初版からの摩滅分を「再板」したこと、それが初編から十八編までであることがうかがわれる記述である。しかし「摩滅の分」が「新板同様」「新板同然」に「再板（版）」されたということは、初版の版本を利用した後印本が出されたのではなく、新たに版を作ったという可能性も考えられる。

そこで初編〜十八編について現存する諸本を調べたところ、初〜六・十・十一・十三〜十六・十八の各編には、被せ彫りによる改版本、つまり覆刻本が存在していた。また、九編には表紙のみ覆刻したものがあり、三編には覆刻版の出版以前に数丁を改修した改修本があることもわかった。さらに、覆刻本の板元はひとしなみに柳下亭とは言えな

いことも見えてきた。

表2は、初編〜十八編の初版・覆刻版・求版後印本について、表紙・見返に示された板元名と奥目録の年次・板元を示したものである。編によつては、覆刻版のなかに、一部の丁のみ覆刻してあるものと全丁にわたつて覆刻してあるものとがあり、適宜注記した。また、求版後印本は、覆刻版のある編については覆刻版の後印本、覆刻版のない編については初版の後印本となる。丸括弧内は、当該書に備わる奥目録の年次・板元名である。年次は改元にかかわらず原表記のまま示し、板元が表紙・見返の板元と同じ場合は「同」として示した。覆刻版・求版後印本は、版元ごとに、奥目録の年次が最も早いものを取り上げた。丸数字は当該書の所蔵先を示す記号である（後掲「所蔵先一覧」を

表2 初編〜十八編の初版・覆刻版・覆刻版の後印の板元と奥目録の年次・板元

編／版	初版	覆刻版	求版後印本
初	藤岡屋（嘉永二・同）①③	※口絵のみ覆刻 藤岡屋（嘉永二・同）⑦ ※他の丁も覆刻 藤岡屋（嘉永二・同）④⑤⑧	柳下亭（安政四、安政六・同）② 広岡屋（万延元・同）⑤
二	藤岡屋（嘉永三・同）①	※口絵のみ覆刻 藤岡屋（嘉永三・同）⑦ ※他の丁も覆刻 柳下亭（嘉永二・藤岡屋）④⑥⑧	柳下亭（安政四、安政六・同）② 広岡屋（万延元・同）⑤
三	藤岡屋（嘉永三・同）①②④ ※一部の丁を改修 藤岡屋（嘉永三・同）⑦	※初版の覆刻 柳下亭（嘉永三・藤岡屋）③⑥⑧	広岡屋（万延元・同）⑤

四	藤岡屋（嘉永四・同）①②④⑥	藤岡屋（嘉永四・藤岡屋）⑧	広岡屋（万延元・同）⑤
五	藤岡屋（嘉永四・同）①②④⑥	藤岡屋（嘉永四・藤岡屋）③⑧	広岡屋（万延元・同）⑤
六	藤岡屋（嘉永四・同）①②⑥	柳下亭（嘉永四・藤岡屋）③⑧	広岡屋（万延元・同）⑤
七	藤岡屋（嘉永五・同）②④⑥	なし	広岡屋（安政六・同）①
八	藤岡屋（嘉永五・同）②④⑥	なし	広岡屋（安政六・同）①
九	藤岡屋（嘉永五・同）②④	※表紙・見返のみを覆刻 柳下亭（嘉永五・藤岡屋）⑥⑧	広岡屋（安政六・同）①
十	藤岡屋（嘉永五・同）②④	藤岡屋・柳下亭（嘉永五・藤岡屋）③⑥⑧	広岡屋（安政六・同）①
十一	藤岡屋（嘉永六・同）②④	藤岡屋・柳下亭（嘉永五・藤岡屋）③⑧	広岡屋（安政六・同）①
十二	藤岡屋（嘉永六・同）②④⑥	なし	柳下亭（安政四、安政六・同）① 広岡屋（万延元・同）⑤
十三	藤岡屋（嘉永六・同）②④	※一部の丁のみ覆刻 藤岡屋（嘉永六・同）⑥ ※他の丁も覆刻 藤岡屋（嘉永六・同）③⑧	柳下亭（安政四、安政六・同）① 広岡屋（万延元・同）⑤
十四	藤岡屋（嘉永六・同）②④	※一部の丁のみ覆刻 藤岡屋・柳下亭（嘉永六・藤岡屋）⑥ ※他の丁も覆刻 藤岡屋・柳下亭（嘉永六・藤岡屋）③⑧	広岡屋（安政六・同）①
十五	藤岡屋・柳下亭（嘉永七・同）②③⑥	藤岡屋・柳下亭（嘉永七・同）④⑧	広岡屋（安政六・同）①

十六	藤岡屋・柳下亭（嘉永七・同）②③⑥	藤岡屋・柳下亭（嘉永七・同）④⑧	広岡屋（安政六・同）①
十七	藤岡屋・柳下亭（嘉永七・同）②③④⑥⑧	なし	広岡屋（安政六・同）①
十八	藤岡屋・柳下亭（安政二・同）②④	広岡屋（安政六・同）①	

参照）。

求版後印本の奥目録について補足しておく。表2の初・二・十二・十三編の求版後印本の項に「柳下亭（安政四、安政六・同）」とあるのは、上・下冊に各一枚備わる奥目録が、安政四年・柳下亭のものと安政六年・柳下亭のものの組み合わせになっていることを意味する。これと同じ奥目録の組み合わせは、初版本では二十四編（安政四年九月改、安政五年序）～二十六編（安政五年五月改、安政五年序）に見られる。これらの編は、改・序年記から実質的には安政五年の出版と考えられるので、同じ体裁の奥目録を備える求版後印本の出来時期も安政五年と推察される。次に初・六・十二・十三編の求版後印本に「広岡屋（万延元・同）」とあるが、この奥目録は、広岡屋の名で年記はなく、「白縫譚」の三十一編～三十六編が広告されている。三十一編は万延元年四月改、万延元年中夏序であるので、この奥目録の年次を万延元年と推し、便宜上このように表した。

ついで、※を付した編について述べておく。まず初・二・十三・十四編は、いずれも最終的には全丁が覆刻されるが、一部の丁のみ覆刻された本が確認されている。ここから、覆刻は一度に全丁について行われたのではなく、摩滅した版本から取り替えていったらしいことがわかる。次に三編は、藤岡屋による初版と、初版の表紙と本文の版本の一部を改修した改修版、および改修前の初版の版本を覆刻した柳下亭版、広岡屋による覆刻版の後印本の四種がある。

改修の事情については後述する。また、九編の覆刻版は表紙・見返のみが覆刻されている。

次に、各編における板元の関わり方を明確にし、柳下亭の広告文が示すものの実態について述べることにしたい。  
初版・覆刻版・覆刻版後印の板元の組み合わせは、およそ次のように分類できる。

- A 初版・覆刻版は藤岡屋、覆刻版後印が柳下亭、さらにその後印が広岡屋から出されたもの：初・十三編
- B 初版・覆刻版は藤岡屋、覆刻版後印が広岡屋から出されたもの：四・五編
- C 初版・一部の丁を覆刻した版が藤岡屋から出され、柳下亭が求版後に他の丁も覆刻し、その後印が広岡屋から出されたもの：二編

- D 初版は藤岡屋、覆刻版が柳下亭、覆刻版後印が広岡屋から出されたもの：三・六・九編
- E 初版は藤岡屋、覆刻版が藤岡屋・柳下亭、覆刻版後印が広岡屋から出されたもの：十・十一・十四編
- F 初版・覆刻版は藤岡屋・柳下亭、覆刻版後印が広岡屋から出されたもの：十五・十六編
- G 初版は藤岡屋・柳下亭、覆刻版が広岡屋から出されたもの：十八編

藤岡屋・柳下亭・広岡屋が、それぞれに覆刻版の制作に関与していることがわかる。藤岡屋は、単独で覆刻版を出す（A・B）、柳下亭との相板で覆刻版を出す（E・F）の二通りの仕方に関与している。柳下亭は、覆刻版の版行に関わる（C・D・E）、初版・覆刻版とも版行する（F）の二通りの仕方に関与している。C・D・Eの場合、柳下亭版はいずれも表紙の板元名を藤岡屋から柳下亭に修正し、さらに「再版」の文字を入木している。C・Dは見返の板元名も柳下亭に改めていることから、この覆刻版は柳下亭の単独版行であると考えられる。一方でEは見返の板元名が藤岡屋のままであり、藤岡屋・柳下亭相板による覆刻版と推察される。これら以外の編についての柳下亭の関わり方は、覆刻版を求版して後印を出す（A）、あるいは関与が確認できない（B・G）のいずれかである。しかしなが

ら、前掲の広告どおり安政三、四年時に初編から十八編までを一括して売り出していたと仮定すれば、Bについても柳下亭によって求版された覆刻版があったと推察される。また、Gに該当する十八編については、初版（安政二年）からさして時間が経っていないことから、柳下亭は初版の後印を印行したと想像される。そして広岡屋は、初六・九・十・十一・十三・十六編については覆刻版を求版し、十八編のみ自前で覆刻版を制作したと考えられる。

以上、覆刻版の制作が一律に柳下亭によるものでないことは明らかである。前掲広告に言う、初編から十八編までの「再版」には、実際には既に制作されていた覆刻版の求版本や、初版の後印本が混じっていた。しかし、十八編のうち六編分（表紙のみの覆刻も含めれば七編分）の覆刻に出資した柳下亭としてはかなり力を入れた事業であったと考えられ、作中で「再版」を繰り返し宣伝したことも理解できる。

ところで、覆刻版の作られなかった七・八・九・十二編の本文の版本は、安政三、四年頃には必ずしも良いわけではなかったと思われる。しかし柳下亭が何の工夫もしていなかったかという点、必ずしもそうとは言えない。例えば九編は、表紙のみ新たに覆刻し、本文のある丁は初版のままであるが、それでも表紙だけ見れば、初版の後印本より覆刻版の方が当然ながら摺り状態が美しい。さらに九編には柳下亭によって新たに作られた袋が存在している。なお柳下亭製の袋は五編・六編についても見つかっている。冊子本体に比べて袋の現存数は多くなく、実際には他の編についても、柳下亭によって新調された袋が存在していたかも知れない。新しい袋をかけて売り出せば、中身は後印本であっても、とりあえず「新版同様」に見えたであろう。柳下亭が「新版同様美麗」と広告した背景には、こうした細かい工夫も含まれていたのではなからうか。

次に、覆刻版の刊年と奥目録の問題についてまとめておきたい。

表2からわかる通り、覆刻版に備わる奥目録の板元は、必ずしも覆刻版それ自体の板元と一致していない。また年



次も、初版より古い年次のものや初版と同年のものがあり、奥目録の年次すなわち刊年と見なすことは難しい。むしろ、覆刻版の奥目録は既成の奥目録を適当に付していると考えた方がよい。

一般に合巻の刊年は見返や序などの年記や改印から判断し、それらに依拠できない場合、奥目録の年記を参考にする（もちろん後人による改装がなされていないことが前提となるが）。後印本の場合、改印および見返や序などの年記が彫り直されていないとすれば、奥目録が刊年を判断する唯一の手がかりとなる。だが、今回の調査では、覆刻版に備わる奥目録が初版のまま、あるいは初版より古い年次で一見不審に思われるものを備えている場合もあった。同様の例が複数確認されたことから、それらは後人の改装によるものではなく、原装時のままである可能性が高いと思われる。例えば、二編では藤岡屋によって一部の丁が覆刻された後、柳下亭が求版し他の丁も覆刻しているが、当初、柳下亭版の奥目録は嘉永二年・藤岡屋のものになっている。これが原装であると仮定して、柳下亭の奥目録の付される時期が安政五年であることを勘案すると、板元が交替してもただちに奥目録が新調されるわけではないということが見えてくる。ただしこのことが『白縫譚』が刊行されていた幕末に特有の現象であるのか、合巻一般にあてはまるのかは、今の段階ではわからない。ともあれ『白縫譚』に関しては、覆刻版の出来年次推定において奥目録を手がかりにすることはできず、表紙・見返に表記された板元が出版を請け負っていた間に出来たと推定するにとどめたい。

### 三 三編の改修本

三編には、初版、初版の表紙と本文数丁に修正を加えた改修版、初版を全面的に覆刻した覆刻版が存在する。まず三者の版面の差異について述べ、次に改修が行われた理由について考えてみたい。

初版は表紙に、島田髷に笄を挿した遊女と当世風の髪型をした禿が描かれているが、改修版の表紙は、遊女の髪型は勝山髷に、禿の髪型は稚児髷に改刻されている。また、八丁裏・十二丁表・十二丁裏の遊郭内部と遊女を描いた挿絵において、改修版では遊女の簪が削除されている（なおその他の丁はすべて同版である）。この部分改修本は初版本よりも多く流布しているようである。柳下亭による覆刻版は、改修版ではなく初版を全面的に覆刻し、表紙・見返の板元名を「柳下亭」とした上、表紙に「再板」と明記して出版したものである。のちに広岡屋がこれを求版し、さらに表紙・見返の板元を改刻している。初版と覆刻版の差異を略述すると、表紙はほぼ同構図だが、覆刻版では遊女の後差しの簪が着物に接しており（初版は接していない）、図全体のバランスが微妙に異なる。また、口絵については、初版三丁裏に描かれた遊女の元結は二枚であるが、覆刻版では一枚になる。本文挿絵は、部分改刻版で完全に削除された遊女の簪が覆刻版では復活するが、八丁裏の場合、前差しの簪のみ復活し、後差しの簪と笄はない。

改修の理由は何であろうか。改修は遊女屋内の遊女図についてのみ行われており、簪を削除するという形で遊女らしさを抑えている点は、天保改革時に行われた改修と同じ方向性を持つ。浮世絵や合巻に遊里・遊女を描くことは天保改革時に厳しく取り締まられ、嘉永三年の時点でも建前としては禁止されていた。当初からこれを憚る意図があったのならば、初版に当世風の遊女が描かれることはなかったであろう。実際に売り出してから、急に彫り改めたのは別に理由があると思われる。

『嘉永撰要類集』<sup>⑥</sup>によれば、嘉永元年十一月に藤岡屋慶次郎と川口屋宇兵衛が出版した「両宮遷幸之図」の錦絵について、嘉永二年閏四月に、伊勢内宮・外宮長官等から幕府へ出版差し止めの願いが出された。この錦絵は名主改を通じて売り出されたものであり、六月に幕府が絵双紙掛名主と町年寄等を糺したところ、この錦絵に「禁忌之廉」が見あたらなかったので販売したと、文政十三年にも山口屋藤兵衛等から「遷宮之図」が販売された例のあること

が申し立てられた。八月に幕府は、これまで同様の錦絵を差し止めていないのに今回の錦絵を差し止めるとすると「一事両様ニ相心得、失体ニも相当候」と判断し、差し止める根拠はなく、「売買いたし不<sub>レ</sub>苦候」と結論している。

結果的には藤岡屋へのお咎めはなかったのであるが、自家版の錦絵が取り調べの対象となったことが公儀を憚る意識を先鋭化させた可能性はある。また嘉永四年三月に地本双紙問屋が再興された際、「己後月行事を立、兼て被<sub>二</sub>仰渡一候、風俗等ニ抱（拘）候絵物合巻双紙類無<sub>レ</sub>之様、急度相守、開板取締向之儀は是迄之通相心得、掛り名主中改請可<sub>レ</sub>申候」（『諸問屋名前帳』<sup>⑦</sup>）という申し渡しがあり、「風俗」にかかわる内容を扱うことが改めて禁じられた。

三編の初版は嘉永三年正月である。前年の錦絵の一件と当年春の問屋再興に関わる申し渡しが藤岡屋に初版の改修を決定させたとすれば、改修版の出来は嘉永三年四月以降と推察される。

なお、十三編の口絵には遊女屋と遊女の図が描かれ、十四編・十五編には本文の挿絵にも遊女屋内部の図がある。十五編の表紙に描かれた女性は、髪飾りさえ控えめだが明らかに遊女の姿である。これらの改修本は確認されていないので、嘉永六、七年頃には公儀を憚る意識が弛んでいたものと思われる。柳下亭による初版の覆刻もそうした雰囲気の中で行われたのではないだろうか。

#### 四 その他の編

ここでは三編以外の覆刻版について略述するが、覆刻版は初版を精巧に再現したものであり、微細な差異の一端を記述すると煩雑になる。よって初版・覆刻版の差異が明瞭な箇所についてのみ記す。

初編。三丁表の梅の枝が覆刻版ではやや簡略化される。十一丁裏、初版では縄の端が右向きにはつれているが、覆

刻版では繩の端は丸くなり、ほつれはない。

二編。二丁裏三丁表の石段の目が覆刻版では粗くなる。七丁表の床の間に散らばる花卉が初版では三枚、覆刻版では二枚になる。

四編。五丁表に大亀が描かれている。その剛毛の毛先が、初版では適当に不揃いで自然に波打つ様子に描かれているが、覆刻版では毛先が揃っていて動きがない。十丁裏、左上の山道の段々を、初版では四本の線で描いているが、覆刻版では三本になる。

五編。十丁裏、左側に立つ刑部の右足親指に、覆刻版では黒い線状の彫り残しがある。

六編。二丁裏三丁表、中央ノド付近に岩が描かれている。初版では岩のごつごつした様子が細かく描かれ、見開き画面で描線が連続しているが、覆刻版では描写が簡略になり、見開き画面で岩を描く線が連続していない。

十編。十四丁裏、遠景に水平線が見え、帆船の帆だけが小さく描かれている。扇を手に立つ男（右から二人目）の右背後に見える水平線に、初版では三艘の帆が描かれているが、覆刻版では二艘になる。

十一編。十四丁裏、囚われた二人の男のうち、左側の男の名印は「唯」である。初版では名印が肩の位置にあるが、覆刻版では膝の位置にある。

十三編。一丁裏、中央ノド付近に遊女の簪の先端が描かれている。覆刻版では先端の周辺に黒い彫り残しがある。

十四編。十八丁裏、濁流の岸辺で切腹しようとしている武士が描かれている。武士の頭上右上の波頭に注目すると、初版では丸い泡のように描かれているが、覆刻版では泡の下に細い足がついて飛沫の形になっている。

十五編。九丁裏、川岸に杭が打たれ、草が生えている。右端の長い杭に注目すると、初版では杭を上回る高さの草が生えているが、覆刻版では杭を下回る葉しか描かれていない。

十六編。二十丁裏、島田番の娘が描かれている。初版では島田番に巻かれた手絡の皺は一本。覆刻版では手絡の皺が四本となる。また、家の壁を見ると、右から三列目最上段の板羽目の、笹の葉がかかる辺りに、覆刻版では黒い彫り残しがある。

十八編。十三丁表、唐紙に柳の絵が描かれている。初版では、唐紙の上端から隙間なく柳の枝が垂れ下がるが、覆刻版では右端ノド付近の枝が省略され、空白になっている。

以上、初版・覆刻版の差異の一部を略述した。十八編までは上記の点を注意することで初版・改版を比較的容易に判別することができる。『白縫譚』の現存本は、改装によって表紙・見返などが失われている場合も少なくないが、図様の違いから初版・改版の別がわかれば出版年代の推定に役立つと思う。

## 六 おわりに

東京都立中央図書館東京誌料所蔵の『白縫譚』の一本には、二丁の紙片が合綴されており、明治二十四年の年記のある「暁山書屋のあるじ」の識語がある。その中に次の一節がある（私に読点・濁点を加えた）。

この不知火物語を、旧幕府の末つ方もはら世に行はれ、紅閨の処女翠帳の少婦などもあそばぬはなかりしに、維新の大政と共に小説の好尚さへあらたまり、西洋の翻訳、さては元禄風の模擬なし侍はかへりみる者もなく、おのれがむすめなとも、いにしへの双紙を仮字多くて読みがたしとて、いたづらに絵のみ見てやみぬるぞうたてき

この作品が幕末に圧倒的な人気を集めながら、明治維新を境に顧みる者もなくなっていったことを惜しむ記述であ

る。合巻というジャンル自体が衰退・消滅してゆく時代の趨勢ではあるのだが、下って現代の目には、合巻『白縫譚』は魅力的な主人公が活躍する物語の面白さはもちろんのこと、書誌においても興味深い作品に映る。本稿で紹介した覆刻版の外にも、初版の早印における表紙の版彩の差異や、序文・口絵の薄墨摺の差異、また後印本に見られるさまざまな版彩の変更・省略は、本書が書誌的に一筋縄ではゆかないものであることを示している。このように多様な諸本が残っていること自体、とりもなおさず明治十年代までの『白縫譚』の爆発的人気を証するものであろう。

調査した『白縫譚』は端本も含めて未だ三十余点に過ぎない。本稿ではそのうち八点を例に挙げたが、遺漏の多いことを危惧している。今回、改版本について報告することにしたのは、現存する『白縫譚』が予想以上に多数あり、多くの方からご批評いただくためにも、むしろ現時点での私見を公表した方がよいと考えたためである。忌憚のない御意見・御教示を賜れば幸いである。

**所蔵一覧** 一カ所に複数点所蔵されている場合は請求番号を付記した。

- ① 東京国立博物館    ② 国会図書館    ③ 国文学研究資料館（ナ四・九四）    ④ 国文学研究資料館（ナ四・一二二）
  - ⑤ 国文学研究資料館（ナ四・一三八）    ⑥ 国文学研究資料館（ナ四・五二八）    ⑦ 架蔵    ⑧ 都立中央図書館東京誌料
- （四七五三・一五）

注

- (1) 続帝国文庫二十八・二十九(博文館編輯局校訂、一九〇〇・一九〇九、博文館)には九十編までの翻刻が収められているが、七十二編以降の稿本・版本は所在不明である。
- (2) 小池藤五郎「白縫譚」解説(『日本文学大事典』増補改訂版、新潮社、一九五〇・一九五二)、石田元季『草双紙のいろ』(南宋書院、一九二八)、鈴木重三「白縫譚」解説(『日本古典文学大事典』第三卷、岩波書店、一九八四)・同「しらぬひ譚」(『絵本と浮世絵』美術出版社、一九七九、佐藤悟「泉親衡物語」と『白縫譚』(『読本研究』第十輯上套、一九九六)など。
- (3) 注2前掲書。
- (4) 『東京大学所蔵草双紙目録』三編・五編、青裳堂書店、二〇〇〇・二〇〇一
- (5) 例えば『臘月猫草紙』初編・二編において、初摺本に描かれた芸妓が後摺本では普通の女性に改修されていることが指摘されている。『草双紙の発生と展開』展示資料目録(東京大学総合図書館、一九八三)による。
- (6) 弥吉光長『未刊資料による日本出版文化』第三卷、ゆまに書房、一九八八
- (7) 『未刊資料による日本出版文化』第三卷(注6前掲書)による。私に読点を補った。